

佃式符号の変遷

萩谷哲夫

おことわり

初めにおことわりして置きたいことは、佃塾の速記方式というものを説明する前に、少々古くさくまた手前ミノのような感があつてまことに恐縮だが、一応佃塾の伝統といつたようなものの概略を、できるだけ簡単に述べて置きたいと思う。

佃速記塾の創立者である佃与次郎先生は、今の速記士諸君にはあまり知られないかも知れないが、日本の速記の存在価値が、僅かに議会(国会)と一部の新聞社方面にしか認識されていなかった速記術の草創期に速記塾を開き、幾つかの経机のような小さな机をこしらえて寺小屋式に、いろいろな困難と闘いつつ速記術の教授と普

号のこともさることながら、むしろその方を書きたいと思うのだが、それでは編輯長の御注文に反するから、それは他の機会に割愛する

初期の符号

さてそういう伝統ある佃塾の符号だが、佃先生は、これが佃式だとは自らは決して言われなかつたし、私なんかにも言わせなかつただから私も現在「佃式」とは、自分の口からは言っていないつもりである。それはともかく抑々佃先生の符号そのものが、日本速記法草創期のものだから、田鎖綱紀先生直伝のものとは大差なく、私も二三回見たが、「アリマス」などを基本符号で書いてあり、相当原始的なものであつた。だから今の言葉で言うならば、佃速記塾の符号と言つて差しつかえないと思う

先輩の符号研究

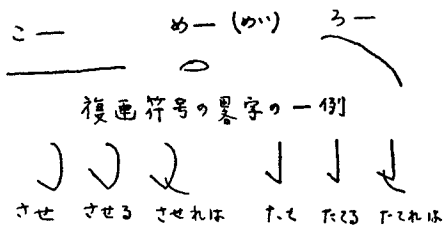
佃塾の初期から中期にかけて、その門下生中の秀才といわれた長谷川篤氏(衆院から三井同族会)

月江鶴英氏、小宮八十二氏(共に貴族院速記士から練習所教官)らわれわれの大先輩が、その豊富な経験に基いて符号を研究し、佃先生を援けて後輩を導いた。しかしこの時代の符号もまた田鎖系統の複画面式で、基本符号はもちろんだが、主として重点を置かれたのは略符号、省略法の研究、改良にあつたようである。殊に長谷川氏は支那語の速記符号まで考案研究したといふくらい熱心な大家で、現在われわれが使用している略符号省略法は、当時佃塾発行の「速記」誌上に発表された、長谷川氏研究のものが大部分である。長谷川氏直門下生の菅野市吉氏、吉岡助次郎氏など、七十歳を超える高令でありながら、今なお速記実務を易易とこなしていられるのを見ても両氏自身の優秀性はもちろんであるが、その符号がいかに優れたものであるかを証するものであろうと思う。

現在は単復折衷

佃塾の符号としては単画折衷の方式で進むのが最も適當ではなからうかという考え方から、図表のような単復折衷の符号を現在使用している。

	わ	く	お	え	う	い	あ
か	／	／	／	／	↑(1)	／	／
さ	／	／	／	／	／	／	／
た	／	／	／	／	／	／	／
な	／	／	／	／	／	／	／
は	／	／	／	／	／	／	／
ま	／	／	／	／	／	／	／
や	／	／	／	／	／	／	／
ら	／	／	／	／	／	／	／



佃塾のこれまでの行き方からすれば、田鎖系統の複画面式で進むべきであろうが、しかし速記の対象は、今や非常にスピード化して来

てゐる。これに対応するのに、複画面式必ずしも不適當とは思わな

は、少しでも書き易くてスピードに乗るような、しかも反訳に成るべくこまかい神経を使わないでも読みこなせるような符号であることが望ましい。その意味から私は

折衷といつても結局は基本の符号は勢い単画が多くなるを得ないし、中には同型の音符を二字以上綴る場合まぎれ易く、書き表わしにくいものも出て来るので、同一の符号に変化をもたせるものもあるわけで、たとえば図の中

キにして、従来の一音符の基礎符号を二音符以上の略符号に応用してみた所、案外書き易く読み易く誤訳もほとんどないので、現在のところ大いにこれを活用している

位置の変化その他による省略法あるいは略符号等は、初めにちよつと触れたように、その大部分は長谷川氏の考案によるもの、あるいは小宮氏は私の直接の先生だから小宮氏直伝のもの、月江氏の考案によるもの等を、少しでも佃の伝統を失わないようにという意味からもこれを多く受けついでいる

その中にはちやんとした理論的根拠を持つたもの、そうでない特定のものもあるわけだが、それを一々ここで列挙することは、紙数にも限りがあり、かえつて中途半端になるおそれもあるので、これは省かせていただく。

基礎符号を尊重

なお最後に、民間の学習者は両院の練習生諸君と違つて、速記以外のいわゆる高等常識の修養時間

速記練習時間も少ないのだから、あまり早くから符号を簡略化し、あるいは練習の焦りなどから符号角度の正確度を乱すようでは実用に適さないと信じているので、私は極端といわれるほど基本符号尊重主義をとつていますが、そのこともまた佃速記塾の伝統の一つであることをつけ加えて置きたい。

徒らに冗漫に流れ、肝心の符号の核心に触れ得なかつたことは恐縮に堪えないが、大方読者諸兄の御批判、御教示を願えば幸いです。

今年の六月号から十三回にわたつて掲載してきた各式の紹介は今号をもつて終る。学習者からは非常な好評をもつて迎えられたようだが、ここにあらためて各式の執筆者に対し御礼を申し上げます。

編集部